新刊紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

島尾永康著『物質理論の探求』

（岩波書店、新書判、二二九頁、二八〇円）

ここ十数年のうちに、西欧近代科学史研究の上で、いくつかの大きな進展があった。科学史を考慮に入れた「動的科学理論」及び物質理論を中心とした十八世紀科学史に関するものが、その主要な成果である。前者については、クーン、ハンスン等の邦訳書や日本の学者による啓蒙書を通して、我が国でも、漸次常識化しつつある。後者は、ある意味では従来の研究を一変させたといってよく、欧米においては、前者以上に研究成果は出ているが、我が国では、少数の例外はあれ、ほとんど紹介が試みられなかった。関連する領域の広さ、同時代の資料を駆使した研究の多様さと精緻さ、等が、日本の学者の手に余ったのかもしれない。このため、学会で十八世紀関係の研究を発表しても、大部分の科学史家には何を言っているのかさえ分かってもらえない現状である。島尾教授の著書は、後者についての待望の書であり、最新の研究成果をふまえた、広義の十八世紀物質理論史でもある。

ニュートン科学の十八世紀科学に与えた大きな影響については、これまでも認められてきはしたが、それは主として、彼の『プリンキピア』を中心としたものであった。最近の研究は、ニュートン科学のもう一つの柱である『光学』――特に、彼が物質の構造等についての深い洞察を、否定疑問体で書いた「疑問」――の十八世紀科学、就中、物質理論への大きな影響に、注目するに至った。このことと関連して、ニュートンの錬金術及び宗教関係の著作や草稿へも好奇心を越えた注意が払われるようになった。

著者は、第一章の「緑の獅子」では、この最後の点を、第二章の「真空・力・エーテル」では、ニュートンの物質理論を、ニュートン以前及び以後の科学との関係をも考慮しつつ、手際よく論じている。以下の第三章から最後の第七章までは、従来無視されるか、ばらばらに論じられてきた、「親和力の表」、「空気の分析」、「不可〔秤〕量流体」、「酸素の体系」、「元素と原子」が、広義のニュートン主義ないしはその発展ともいえる十八世紀物質理論という広い眺望のうちに、相互に、そして時には当時の科学者の社会生活等とも関連づけられ、論じられている。ここでは、ラヴォアジェに収束するこれまでの化学史は大きく修正され、フロギストン論等の、従来否定的評価が下されてきた主題は、もっと広い歴史的文脈のうちに正しく位置づけられている。

この著書は、新書判にもかかわらず、かなり多くの特徴をもっている。まず、著者は多くの具体例を通して、難解といってもよい最近の諸研究を、平易に、しかも学問

的水準を下げることなく紹介しており、この本は十八世紀科学史研究入門をも兼ねている。又、論点の明確な指摘は、研究書や研究論文を読んでも、必ずしも得られるわけではなく、錬金術記号、ジョフロワの親和力表、ラヴォアジェの元素表等についても、その内容をうまく生かした、行き届いた説明がなされている。専門家を悩ましてきた訳語の問題も、著者の与える、内容をよく表わしている適切な術語によって、大部分解決された。この新書は、専門家以外の人にも分かるよう書かれており、西洋の十八世紀に関心のある人には、特に一読をおすすめしたい本である。

（松尾幸季・大学工学部専任講師）

昭和51年度同志社高校
現国選択生

『とぎつね座亜鈴星雲』

（どらねこ工房、A5判
二一二頁、一、〇〇〇円）

じつにおもしろい本である。いや、おもしろい……という言葉は、この場合、不適切かもしれない。そこで、いいなおしてみると、これは、じつに「ユニークな試み」である。正直いって、ぼくは、この一冊を読み終わった時、拍手しているじぶんを感じたのである。その拍手は何にむけられたものか。そのことを記す前に、まず内容を紹介してみよう。

「これは、昭和五十一年度同志社高校三年、現国選択生全員の『聞書』作品集です。」

「ある人の傍に立ち添うてその人のことばをたっぷり聞きとることを共通了解として、昨年の夏休み頃に伺わせましたものの記録です。」

この小冊子のはじめに、弘英正氏が記している。弘英正氏は、「聞書」という発想を、こうした形あるものにまとめた相当の「先生」である。この「先生」の「現代国語」を選択する七十人あまりの高校三年生

新島襄研究参考図書

My Younger Days　同志社校友会
新島襄の生涯
（J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳）　同志社校友会
新島先生書簡集―続（森中章光編）
同志社校友会
新島襄書簡集（同志社編）―岩波文庫
岩波書店
新島襄先生（徳富蘇峰著）　同志社出版部
新島襄―人と思想（魚木忠一著）
同志社出版部
新島襄（岡本清一著）　同志社出版部
新島先生と徳富蘇峰（森中章光著）
同志社
同志社九十年小史
（同志社社史史料編集所編）
同志社
雑誌「新島研究」　同志社新島研究会
新島襄（和田洋一著）
日本基督教団出版局
※比較的参照しやすいものを掲載

がいる。この選択生が、右の了解事項に従い、それぞれ関心ある人間に接触する。テープをまわし、そのなまみの声を収録する。それを「おこし」、相互の批判を経て「文字化」する。その作業だけをいってみれば簡単だが、ここに収められた五十余人の人間の声を読めば、それがいかに大きな試みであったかということは、よくわかる。「学校の先生」を中心にした第一部。旧友、先輩、同級生の声を集めた第二部。第三部は、父祖母、両親、あるいは、叔母、いとこの話。第四部は、それ以外の社会人の発言。この中には、カメラマン宮川一夫や、元関脇の神風、あるいは、ミュージシャンの豊田勇造と共に、白川女、茶房のマスター、消防署長、牧場主などが含まれている。

個人的にいえば、「高校時代やっぱし、一番ええよ」や、「旧友、カズオと会う」、「おしげはん」、「宇喜田家の試練」に考えこまされたのだが、拍手は、もちろん、そのせいではない。

「学校教育」という場で、この「聞書」の発想が、教室や教科書という狭い「枠組み」をこえる道を示した……といえばよいか。そうした試みをきっかけに、「先生」と「生徒」が、教育本来の可能性を具現してみせた点にある。

第二に、この「聞書」の過程で、「聞き手」が意識するしないは別として、現在の「じぶん自身」という狭い枠をこえねばならなかっただろうし、そうすることによって、自己と他人のありようを、問いなおすきっかけをつかんだだろうということである。「聞き手」は、「聞書」という作業を通して、今までまったく無関心だった「過去」や「他人の生きざま」や「同時代の別の人生」に出会う。そうした「出会い」をつくったものとして、「聞書」はユニークな試みとなっている。

「教育」と「自己」を問いなおす試み……といえばよいか。その結果が、ここに収約されたすぐれた「人間記録」である。

（上野　瞭・女子大学助教授）

＊　＊

【近刊紹介】

『回顧七十七年』（大塚節治著）
B6判　六、〇〇〇円
大塚節治先生回顧録刊行会発行
（取扱・同朋舎、校友会）

『続・同志社歳時記』
（生島吉造・松井全共編）
B6判　七〇〇円
同志社大学出版部発行
（取扱・同志社収益事業課）

『同志社校友会名簿―昭和五十二年度版』
（同志社校友会編）
B5判　一〇、〇〇〇円
同志社校友会発行
（取扱・校友会本部、各支部）